

花街の記憶を残し隊

新潟・古町花街と山形・七日町花小路では、芸妓の唄や踊りを楽しめる花街文化が江戸時代から脈々と受け継がれてきました。2025年11月1日に開催されたこのイベントでは、芸妓のパフォーマンスや山形大学生とのトークショーを交えながら、花街の記憶を未来へ残すために、芸妓・市民団体・学生サークル・大学アーカイブが一堂に集い、これからの伝承と地域の可能性をともに考えました。この記事は、当日会場参加も行った新潟大学「メディア論実習C」受講生が作成しました。

伝統をつなぐ芸

イベントの冒頭では、4人の古町芸妓による舞踊・唄・三味線の芸が披露されました。踊りを主にする立方（たちかた）と、唄や語り、三味線や鳴り物の演奏を担う地方（じかた）の二つの役割に分かれて演目がはじまります。今回は、3つの演目を披露いただきました。

「四季の新潟」より春・冬 扇子を用いた優雅な踊りで、唄の中にはさまざまな新潟の地名が登場します。季節の情緒を表す仕草が随所にみられ、踊りと唄が描き出す情景を思い浮かべながら味わえる演目でした。

「佐渡おけさ」 水色と白色の手ぬぐいを使った踊りが印象的でした。佐渡おけさは北前船にまつわる唄であり、船乗りによって伝えられた九州のハイヤ節が元唄とされています。新潟と海との深い結びつきを感じることができました。

「新潟小唄」 四つ竹という竹を四つに割った和製カスタネットを用いた踊りでした。新潟小唄は民謡としては珍しく、歌詞の中に外国語が入った曲です。北洋漁業で栄えた歴史が反映されており、中でも新潟と交流が深かったロシアの言葉が取り入れられています。

このように、芸妓の舞踊には多様な表現があり、唄には時代背景や土地の文化が刻まれています。今回の3曲は、新潟らしさを強く感じさせる演目で、美しい三味線の音色と唄、たおやかな舞踊が会場全体を魅了しました。



「新潟小唄」の舞の様子。立方2人が四つ竹を手にしている。

古町芸妓の魅力 芸妓トークから探る

今回のイベントでは山形大学学生サークル「まちの記憶を残し隊」隊員が聞き手となって、世代の異なる古町芸妓4名にお話を伺いました。

芸妓と聞くと、まずは踊りや唄といった華やかな芸が思い浮かぶ人も多いかもしれません。しかし、実際にお話を伺うと、古町芸妓の皆さんは、芸を大切にしつつも、自らの仕事の本質が「お座敷でのおもてなし」にあると捉えていることがわかりました。お座敷はお客さんを楽しませる場であり、芸はあくまでもその手段として磨かれてきたのです。お座敷では今も昔も「飲み上手・話し上手・聞き上手」であることが大切で、今回の4名の皆さんもお客さんに寄り添いながら、笑顔を引き出す力を身につけてきたのです。

また、現在では数少なくなった芸妓が、世代を超えて支え合いながら暮らすことも重要だと言います。芸歴が長い扇弥さんは、置屋組合長を務めていた際に、年上のお姐さん方からの根強い反対を押し切って、若手芸妓の育成・派遣に取り組む柳都振興株式会社の設立に協力したことを教えてくれました。そして、今も自分がお座敷に立てるのは、柳都振興が育てた後輩芸妓がいてくれるからなのだと言います。一方、柳都振興育ちのあやめさんは、かつてはお座敷が二次会、三次会と盛り上がり、帰りが午前をまわってしまうことも度々あったけれど、そのような機会に先輩芸妓から聞いた話や学んだことが、今に役立っていると話します。こうしたエピソードを笑いを交えて話される皆さんの姿からは、芸妓同士の絆を大切に仕事に取り組む様子が伺えました。

芸妓に対しては、非日常的な遠い世界の存在というイメージを持つ人も少なくありません。しかし、扇弥さん、あやめさん、和香さん、みすずさんのお話からは、世代を超えて支え合って暮らす彼女たちの親しみやすい姿が見えてきました。格式高い芸と、人間味あふれる温かな人柄。その両方を併せ持つことが、古町芸妓の大きな魅力なのだと感じました。



右から 山形大学学生の高橋さん、遠藤さん
古町芸妓の扇弥さん、あやめさん、和香さん、みすずさん

花街の今とこれから

生まれた時代や立場の違いはありながらも、今回登場いただいた4人の会話は和やかな雰囲気が進み、イベント会場全体にも穏やかな空気が生まれていました。また、イベントでは、新潟まち遺産の会や山形大学学生サークル「まちの記憶を残し隊」、にいがた地域映像アーカイブの活動報告も行われました。時代の変化を受け入れつつも生き続けている花街文化を未来に残していくために、今も芸妓だけでなく、地域に暮らす人々や数々の団体が活動を行っています。